

参考図書紹介

「ミツバチの文化誌」に続編登場

渡辺孝. 1997. ミツバチの文学誌. 筑摩書房, 東京. 268+7 pp. ISBN4-480-85747-8. 本体 2400 円.

養蜂業を営む著者が、昆虫としてミツバチを捉えることに飽きたらず、蜂を巡る古今東西の文学作品を中心とする言説を収集し、文化史的な視点から検討するというユニークな形で書かれているのが本書である。それにしても、そのような試みを可能とした古来からの人間とミツバチとの関わりの深さと、それらを記録した文献を丹念に収集した著者の執念には驚かされる。

ミツバチの生態が、人間の社会さながらの分業化された営為のうちに繰り広げられていることは知られていよう。故に古来、人間は単なる身近な昆虫としてだけではなく、言わばその時々の人間の生き様を映し出すための鏡としてその営みを眺めてきたであろうという考えは、すんなり納得できながらも、それを証明するとなると首をひねらざるを得まい。本書の意義の一つは、その点を豊富な資料から歴史的事実として証明して見せたところにある。著者は、翻訳された小説の諸場面中の長年の生業の場に

おける著者の経験と矛盾する部分を、原典に当たりながら実状に即したものに解釈し直した上で実証的に考えを進めていこうとする。その姿勢は正しく歴史研究家のそれであり、そうした態度が全編に貫かれている点に、単なる好事家の著作に留まらない本書の説得力が生じている。

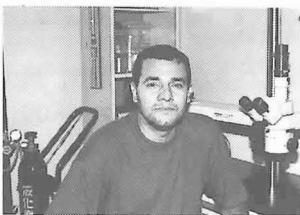
しかし、そのこと以上に注目したいのは、ミツバチの営為を眺める人間の目に反映した当代の文化的コンテキストや作家の思想を、鋭い洞察力を持ってえぐり出し、それを相対化していることである。その点、本書はミツバチと人間との交渉を綿密にたどった歴史書であると同時に、現代を相対化する視点を内包した一種の文化論ともなり得ている。ミツバチの専門家には養蜂の歴史を視野に納めた見地から有益な知識を与えてくれるであろう。と同時に、私のような畑違いの素人にも、その真摯で学究的な態度によって啓発されるところの多い好著である。

玉川学園女子短期大学 渡邊正彦
(評者は日本近代文学の研究者)

ニュース・玉川大学ミツバチ科学研究施設から

パラグアイから研修生

国際協力事業団の依頼で、パラグアイ国農牧省養蜂部農業技師、ペドロ・ブラディミル・ベラ・ディアス (Pedro Bladimir Vera Diaz) 氏が5月19日に来所。6月6日まで女王蜂の人工授精法を中心に研修が実施された。



研修中のペドロ氏

編集後記

岡田一次博士の米寿 (88=はちはち) 記念号として多くの方から祝辞や先生にまつわるエピソードをいただき、誌面が不足してページを追加するという事態になった。それでもあれこれも書き足りないことばかりだろう。先生自身にもますますお元気で、これからも業績集にまだまだ追加するものを増やしていただけるようにと願いたい。

鶯谷博士の論文は1月の研究会の講演を土台に書き下ろしていただいた。

ニホンミツバチの飼育法について吉田教授の連載の他に山中氏からも原稿をいただいた。まだこれではなければならないというような飼育方法が完成しているわけではない。読者が創意工夫の中でこれらを参考にして欲しい。(純)